

—いい音、浦安から—
J:COM浦安音楽ホール
2020-2021

～さわやかな秋、こころに響く、ストラディヴァリウスの調べ～

大谷康子 ヴァイオリン・リサイタル
佐藤卓史 (ピアノ)

2020.11/3 (火・祝) 14:00 開演

本コンサートチケット売上の全ては、浦安市文化芸術振興基金に積み立てられ、市民の文化芸術活動の普及振興に使われます。

■主催：浦安市 日本音楽財団
■共催：J:COM浦安音楽ホール
■助成：日本財団



日本音楽財団
NIPPON MUSIC FOUNDATION



<第1部 秋に寄せて>

愛の挨拶

作曲/エドワード・エルガー

ヴァイオリン協奏曲集『四季』より「秋」第1楽章

作曲/アントニオ・ヴィヴァルディ

春の海

作曲/宮城道雄

《生誕250年記念》

ヴァイオリン・ソナタ 第5番 へ長調「春」第1楽章

作曲/ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

《一緒に歌おう!》

もみじ

作詞/高野辰之 作曲/岡野貞一

里の秋

作詞/斎藤信夫 作曲/海沼實

『ブエノスアイレスの四季』より「秋」

作曲/アストル・ピアソラ

<第2部 特別な年に世界の音楽>

《アジア》

『日本民謡による組曲』より 第1楽章

作曲/外山雄三

《アフリカ》

映画『リトルプリンス 星の王子さまと私』より

「Suis moi」

作曲/ハンス・ジマー リチャード・ハーヴェイ

《北米》

映画『ウェスト・サイド・ストーリー』より

「トゥナイト」 「マンボ」

作曲/レナード・バーンスタイン

映画『屋根の上のヴァイオリン弾き』より

「オープニング・タイトル」

「サンライズ・サンセット」

作曲/ジェリー・ボック シェルドン・ハーニック

《南米》

リベルタンゴ

作曲/アストル・ピアソラ

《オセアニア》

ミュージカル『南太平洋』より

「バリハイ」 「魅惑の宵」

作曲/リチャード・ロジャーズ

《ヨーロッパ》

ツイゴイネルワイゼン

作曲/パブロ・デ・サラサーテ

<第1部 秋に寄せて>

エドワード・エルガー：愛の挨拶

「愛の挨拶」は大谷さんがコンサートの初めに、皆さんへのご挨拶がわりにテーマ曲のように演奏する愛奏曲です。1857年に生まれたエルガーはイギリスを代表する作曲家です。ヴァイオリニスト、指揮者でもありました。彼の作品の中でも「威風堂々」の第1曲の中間部「希望と栄光の国」は毎年ロンドンのプロムス音楽祭ラストナイトに演奏され、第二のイギリス国歌と呼ばれています。エルガーは29歳の時に後の妻、アリスを弟子にしました。アリスは結婚後、エルガーのマネージャー、秘書となり、こう記しています。「天才の面倒をみるというのは、いかなる女性にとっても生涯の仕事として十分なものです。」この曲は婚約の贈り物として彼女に捧げられたものです。

アントニオ・ヴィヴァルディ：ヴァイオリン協奏曲集『四季』より 「秋」第1楽章

「四季」は正式名称を「和声法と創意への試み」という全12曲の協奏曲集の最初の4曲のセットのことを言います。その第1曲から第4曲が「春・夏・秋・冬」の情景を描写していることから描写音楽の先駆けと言って良いでしょう。楽譜に四季の自然と人間生活を描くソネット（14行詩）が付けられています。「秋」では、豊作を歌や踊りと酒で祝い、まどろみ、夜明けとともに狩りに出かける様子が書かれています。この四季が作曲されたのは1723年、大谷康子さんが今日演奏するストラディヴァリウスが製作されたのは1725年です。

宮城道雄：春の海

宮城道雄は1894年（明治24年）生まれの箏曲家です。7歳の時に失明してしまいましたが、それが転機となり音楽家を目指し、11歳で免許皆伝、1916年には最高位である大検校の称号を受けました。宮城道雄が1929年に作曲した琴と尺八の二重奏曲「春の海」は1917年（大正6年）、宮城道雄が上京する際に船旅をした瀬戸内海をイメージして描いているそうです。1929年にはフランス人の女流ヴァイオリニスト、ルネ・シュメーが尺八をヴァイオリンに編曲、合奏し、世界的な評価を得ました。

《生誕250年記念》

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第5番 へ長調 「春」第1楽章

今年2020年はベートーヴェンの生誕250年に当たります。「春」はベートーヴェンが作曲した10曲のヴァイオリン・ソナタの中で5番目の曲で1800年～01年にかけて作られました。「春」という副題はベートーヴェンが名付けたわけではありません。曲を聴いた人が「春」のようだと感想を述べているうちに「春」という名前が定着しました。それまでピアノとヴァイオリンのソナタではピアノがより主要な役割を担っていたのですが、ベートーヴェンのこの第5番辺りからヴァイオリンもピアノと同等な役割を果たすようになりました。

《一緒に歌おう！》

作詞／高野辰之 作曲／岡野貞一：もみじ

1911年（明治44年）に「尋常小学唱歌（二）」に発表されました。作詞の高野辰之は長野県出身の作詞家です。碓氷峠のあった信越本線の駅から紅葉を眺めて作ったそうです。子どもの頃の秋の遠足、バスの中で、みんなで歌った方も多いのではないのでしょうか。

作詞／斎藤信夫 作曲／海沼實：里の秋

1945年に川田正子の新曲として全国放送され、翌年からラジオ番組「復員だより」のテーマ曲として使われました。終戦の頃、外地にいた日本人は660万人と言われていました。静かな秋の夜、母と子が栗の実を囲炉裏端で煮ています。今も外地にいるお父さんの笑顔を夜空の下で思いつつ、南方からの無事な帰国を祈るこの歌は戦後の日本人の共感を呼びました。

アストル・ピアソラ：『ブエノスアイレスの四季』より「秋」

アストル・ピアソラは1921年生まれのアルゼンチンの作曲家、バンドネオン奏者です。踊りのための伴奏音楽であったタンゴははっきりしたリズムと叙情的な旋律を持ったわかりやすい音楽でした。ピアソラの功績はタンゴにニューヨークのジャズのエッセンスを注入し、メロディーを自由に飛躍させたことにありますが、従来のタンゴからは先進的すぎたために「踊れないタンゴ」と冷遇されました。しかし現在では国際的に高く評価されています。ブエノスアイレスの四季の第2曲として書かれた「秋」は、もともとはピアノ・ヴァイオリン・チェロのために書かれていますが、今日は大谷康子さん自身による編曲版で演奏されます。

<第2部 特別な年に世界の音楽>

2020年の日本は特別な年を迎えるはずでした。肌の色も言葉も違う人たちが世界中から東京に集い、音楽の世界も東京中のコンサートホールや街角で、五大陸の音楽が奏でられ、歌に溢れる夏を祝うはずでした。しかし、別の意味で「特別な年」になった2020年、音楽家も音楽関係者も立ち止まり、自分たちにできることを考え、前に進もうと自分たちを奮い立たせました。そうして街に音楽が戻ってきました。第2部ではテレビ番組「おんがく交差点」であらゆるジャンルの音楽家と共演し、世界の音楽にチャレンジする大谷康子さんが、世界の人々との再会を祈って五大陸の音楽をお届けします。

《アジア》

外山雄三：『日本民謡による組曲』より 第1楽章

外山雄三は日本を代表する作曲家にして指揮者です。日本の民謡を素材にした曲調に特徴があり、なかでも1960年のNHK交響楽団初の世界一周演奏旅行にあたり作曲された「管弦楽のためのラプソディ」は海外で最も頻繁に演奏される日本人作曲家の曲のひとつでしょう。1962年に作曲された「ヴァイオリンとピアノのための日本民謡による組曲」もこの作曲技法の延長上にあります。本日、演奏される第一楽章では「ちゃっきり節」が使われています。

《アフリカ》

ハンス・ジマー／リチャード・ハーヴェイ：

映画『リトルプリンス 星の王子さまと私』より「Suis moi」

「星の王子さま（原題：Le Petit Prince / The Little Prince）」はサン＝テグジュペリにより1943年に書かれた小説です。作者自身が描いた挿絵が使われたこの本は世界中で読まれ「大切なものは、目に見えない」など人生の道しるべとなる言葉で溢れています。著者が1935年にアフリカのサハラ砂漠で飛行機墜落事故を体験したことが本書の元となったと言われていいます。映画版はフランス流お受験生活を送る「私」が隣家に住む年老いた「飛行士」に出会う星の王子さまの後日談です。この「Suis moi」という曲は2016年に公開されたフランス版に使われています。

《北米》

レナード・バーンスタイン：

映画『ウェスト・サイド・ストーリー』より「トゥナイト」「マンボ」

レナード・バーンスタインも優れた指揮者・教育者であり、作曲家でした。「ウェスト・サイド・ストーリー」は1957年にブロードウェイのミュージカルとして初演されましたが、音楽はバーンスタインが担当しました。1961年には映画化されアカデミー賞において10部門を受賞しました。日本では1964年に本場から招聘され日生劇場で2ヶ月間50公演が行われましたので、ご覧になった方もいらっしゃることでしょう。マリア役のナタリー・ウッドの歌う「トゥナイト」は実はマーニ・ニクソンにより吹き替えられていました。体育館でのダンスパーティのシーンで踊られる「マンボ」は普段は「マンボ」と、会場の皆さんに叫んでいたのですが、今回はコロナ対策の特別な演出でご参加いただきます。

ジェリー・ボック／シェルドン・ハーニック：

映画『屋根の上のヴァイオリン弾き』より

「オープニング・タイトル」「サンライズ・サンセット」

1964年にミュージカルとして制作され、1971年に映画化された「屋根の上のヴァイオリン弾き」の舞台はウクライナの小さな村のユダヤ人コミュニティです。主人公のテヴィエは、今は亡き森繁久彌さんの当たり役でした。題名はおそらくシャガールが故郷ヴィテブスクを描いた「緑色のヴァイオリン弾き」を下敷きにしています。ユダヤ人を迫害した皇帝ネロのローマで逃げ惑う群衆の中にひとりヴァイオリンを弾く男がいたという故事に基づくという説もあれば、シャガールがユダヤ教とキリスト教の併存を願ったという説もあります。世界はひとつという祈りを込めて、アイザック・スターンが映画の冒頭で奏でた「オープニング・テーマ」とテヴィエの長女ツァイテルの結婚式で歌われる「サンライズ・サンセット」をウクライナと縁の深い大谷康子さんが演奏します。

《南米》

アストル・ピアソラ：リベルタンゴ

アルゼンチンタンゴを代表する作曲家は今やピアソラと言っても過言ではないでしょう。しかしパリ留学から帰ったピアソラは「タンゴの破壊者」と呼ばれました。彼の作った聴くためのタンゴは今までのタンゴとあまりにも違ったからです。1974年作曲のこの曲の「リベル」とは「自由」という意味です。それまでのアコースティック楽器を中心として演奏されたタンゴに電子楽器を加え、タンゴを「踊る」ための音楽から聴くための音楽に解き放ったのです。日本でもウィスキーの会社のCMをヨーヨー・マが演奏して一躍有名になりました。

Program notes 曲目解説

《オセアニア》

リチャード・ロジャーズ：

ミュージカル『南太平洋』より「バリハイ」「魅惑の宵」

今、放送されているNHK連続テレビ小説「エール」では第二次世界大戦の場面が描かれました。「南太平洋」は1949年のブロードウェイミュージカルで、舞台は第二次世界大戦の南太平洋のある島です。従軍看護婦と島に住むフランス人農園主、海兵隊の中尉と島の娘の恋が描かれます。オスカー・ハマースタイン2世の脚本・作詞、リチャード・ロジャーズの作曲のコンビで大ヒットしました。1958年公開の映画版をご覧になったシニアの方もいらっしゃるでしょう。バリハイ山のモデルはタヒチのモウアロア山だということです。

《ヨーロッパ》

パブロ・デ・サラサーテ：ツイゴイネルワイゼン

大谷康子さんの十八番の曲です。稀代のヴァイオリニストとしても知られるパブロ・デ・サラサーテはパリ音楽院でヴァイオリンを学び、13歳の時、ヴァイオリン科で一等賞を得ました。サン＝サーンス、ラロ、ブルッフなどが彼にこぞってヴァイオリン曲を献呈しました。大谷さんがしばしば演奏する「椿姫ファンタジー」を作曲したアラールは「ヴァイオリンの流派」という教科書を書きましたが、サラサーテの先生でした。アラール、サラサーテ、サン＝サーンスの影響を受けたチャイコフスキーとヴァイオリンの系譜は脈々と続きました。

企画構成/プログラム解説：伊藤裕太



ストラディヴァリウス 1725年製ヴァイオリン「ウィルヘルミ」 (日本音楽財団所有)

この楽器は、ドイツの著名なヴァイオリン奏者アウグスト・ウィルヘルミ（1845～1908）によって所有・演奏されていたためこの名前が付けられた。法学博士でありアマチュア・ヴァイオリン奏者であったウィルヘルミの父親が彼のために1866年にこの楽器を購入した。ウィルヘルミの所有していた数多くのヴァイオリンのうち最も愛用されていた楽器だったが、公での演奏活動を休止して暫くたった1896年「演奏者として華のあるうちに引退したい」との理由で、50代の若さで楽器を手放した。

日本音楽財団はアントニオ・ストラディヴァリ（1644～1737）の他、バルトロメオ・ジュゼッペ・グアルネリ（1698～1744）によって製作された弦楽器の名器を保有している。それらは国籍を問わず無償で演奏家に貸し出され、演奏活動に役立てられている。



©Masashige Ogata

大谷康子（おおたに・やすこ）◆ヴァイオリン

2020年にデビュー45周年を迎えた、人気・実力ともに日本を代表するヴァイオリニスト。華のあるステージ、深く温かい演奏で聴衆に感動と喜びを届けており「歌うヴァイオリン」と評される。東京藝術大学、同大学院博士課程修了。在学中よりソロ活動を始め、ウィーン、ローマ、ケルン、ベルリンなどでのリサイタル、トロント音楽祭、ザルツブルク市などに招待され好評を得る。スロヴァキアフィル、シュトゥットガルト室内楽団など国内外の著名なオーケストラとも多数共演。

また、1公演で4曲のヴァイオリン協奏曲を1日2公演行うという前代未聞の快挙を達成し話題となった。2017年はウィーンのみジークフェラインでリサイタルを開催。夏にはロシアの名門モスクワ・フィルの日本ツアーにソリストとして出演し絶賛を博した。キエフ国立フィルとは2017年以降毎年招聘され、2019年11月ウクライナで3年連続で共演した。また、5月に実力派ピアニストのイタマール・ゴランと全国ツアー（12都市）を開催し、8月21日にCDを発売。CDは、ベストセラー「椿姫ファンタジー」（SONY）や、ベルリンでの録音による「R. シュトラウス/ベートーヴェン・ソナタNo.5（ピアノ：イタマール・ゴラン）」（SONY）も評価が高い。その他多数リリース。著書に「ヴァイオリニスト 今日走る！」

（KADOKAWA）がある。BSテレビ東京（毎週土曜朝8時より放送）「おんがく交差点」では春風亭小朝と司会・演奏を務め、八面六臂の活躍をしている。文化庁「芸術祭大賞」受賞。東京音楽大学教授。東京藝術大学講師。（公財）練馬区文化振興協会理事長。川崎市市民文化大使。高知県観光特使。（公財）日本交響楽振興財団理事。

使用楽器は日本音楽財団所有のストラディヴァリウス「ウィルヘルミ」（1725年製）。

公式ウェブサイト <https://yasukohtani.com/>



©Takaaki Hirata

佐藤卓史（さとう・たかし）◆ピアノ

秋田市出身。高校在学中の2001年、日本音楽コンクールで第1位。東京藝術大学を首席で卒業後渡欧、ハノーファー音楽演劇大学ならびにウィーン国立音楽大学で研鑽を積む。その間、2007年シューベルト国際コンクール第1位、2010年エリザベート王妃国際コンクール入賞、2011年カントゥ国際コンクール第1位など受賞多数。ウィーン楽友協会をはじめとするヨーロッパの主要コンサートホールのほか、2011年にはシリア・ダマスカスのダール・アル・アサド文化芸術劇場でソロ・リサイタルを開催した。

これまでにNHK交響楽団、東京交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、広島交響楽団、シドニー交響楽団、ベルギー国立管弦楽団等と共演。2007年にソロデビューアルバム「ラ・カンパネラ～珠玉のピアノ小品集」（ナミ・レコード）をリリース以来、レコーディング活動にも力を入れており、日本と欧州で多数のCDを発表。2014年より「佐藤卓史シューベルトツィクルス」を展開、ライフワークとしてシューベルトのピアノ曲全曲演奏に取り組んでいる。室内楽、作編曲など幅広い分野で活躍している。

BSテレ東「おんがく交差点」出演中 / 毎週土曜朝8:00～放送

<http://www.takashi-sato.jp>